

とあるように、娘は襖門の上、父は門外、錦祥女は高欄に姿絵を挿開き、柄付きの鏡をさし出し、月の光に映して見くらべるのである。しかし月夜に襖下の人の顔を鏡に写すことが出来るだろうか。これは無理である。

けれども其の場面の情味豊かな描写と、絵画的舞台面に、人々は理窟を忘れて喜び、その明らかに嘘と分る「虚」を許したのである。そして遂にこの場面は後の「忠臣蔵」において、祝園の場使用され「おかるが二階の延べ鏡」と階下の由良之助との場面になつたと考えられる。

以上は近松の作品の中から二例を引用して考察したのであるが、彼の作品について言える事は次のようなことであらう。例えば近松の悲劇曲である心中物を味わつてみると、悲劇的内容にもかゝらず全曲の間に一種の明るさが流れており、悲痛なやるせなさを感じさせないで、可哀想という同情心の内にも一種の柔い快感がつきまとう。それは結局彼の創作目的、即ち見物人の魂を解放し、心を慰めるという態度の具現である。彼は悲痛な現実の姿、主人公が死ぬ迄の悲しい事実を正確に只描き放しにするのではなく、「虚実皮膜論」に従つて現実的悲劇を描写しながら、そこに現実を越えた浪漫的な明るさを加えて民衆に「慰み」を与えているのである。

具これは彼の悲劇曲のみでなく全作品に見られるのである。歴史物語についてみても、古い時代に材料を取つて書いたからと言つて、決して厳密な歴史上の事実のみ立脚して書いているものではない。衣装でも風俗でも生活でも皆元祿化されているのである。こゝに近松が民衆に「慰み」を提供する為に用いた「虚実皮膜論」の具現された姿を見るのである。

(湖東中学校勤務)

芭蕉における西行の投影

紫 藤 好 子

西行に私淑することが深かつたといわれる芭蕉が、西行の文学をどのようにとり入れたか。そして、芭蕉は、西行に対してどのような態度をもつて対していたか。

芭蕉の全作品に目を通すことによつて、その発句、連句、文章、書簡などに明らかに西行の影響ありと認められたる箇所をあげることによつて考察をすゝめた。

二

芭蕉は、文学作品を通じて息づいている詩人たちの生き方に対して深い讃仰の情をよせているのであるが、その古詩人たちの中でも特に西行の「人格」「生活」そしてその「芸術」に深い理解をもち、尊敬の念をもつて終始している。そのことがあらわれている文を二・三あげてみると、

「俳諧一葉集」の虚栗集の跋文に、芭蕉が、

「佗と風雅のその生にあらぬは、西行の山家を尋ねて、人のひろはぬ蝕栗也」

と述べている。「虚栗」と「蝕栗」とが異るとの諷刺から出たものであつて、西行の山家生活を慕う芭蕉の心がよくあらわれていると共に、「わび」と「風雅」とを求める心の切なるものがあつたことが伺える。「嵯峨日記」の中に、「山家集」の一首「訪ふ人も思ひたえたる山里の淋しさなくば住み憂からまし」について、「西上人の誦み侍るは淋しさを主とすべし」と評しているのも、「さび」即ち「虚味」なのであろ

う。

芭蕉の第一の紀行集「野ざらし紀行」を見ると、貞享二年に大和地方旅行中、吉野山の中に籠居したが、これは西行の遺跡を探る旅の一環であり、故人への憧憬の深さをも想像せしめるものである。その一節、

「西上人の草の庵の跡は、おくの院より、右の方二町ばかりわけ入ほど柴人のかよふ道のみわずかにありて、さかしき谷を隔てたるいと尊し。かのとくとくの清水はむかしにかはらずと見えて、今もとくとくとと雪落ける。

露とくくくころみに浮世すがばや」

とある。「いと尊し」において、芭蕉が西行を畏敬していたことがわかる。西行は山家の後三年の間、吉野の奥に隠棲して、年々の花を楽しんでいたと伝えられていて、その跡として記念の小庵があつたことが、寛文十一年刊の「吉野山独案内」にのつている。

「奥の院四方正面秘仏の堂あり、山の岨を二町程行苔清水といへる名水あり、此ほとりに西行庵堂をむすばれし、その跡に小堂をたて、彼の法師の御影有。」

であつて、芭蕉は西行の遺跡を慕つて、苔清水を尋ねている。故に、文中「かのとくとくの清水」といつているのは、苔清水のことと思われる。そして、「露とくくく」の句は、西行の詠んだ歌として伝えられている。

とくとくとと落つる岩間の苔清水

汲みほすほどもなき住居かな

を踏んだものと一緒に解されているが、この歌は、西行の家集には見えない。しかし、芭蕉はじめ、素堂・其角などは、西行作と信じていたと考えられる。それは、この時代口論が確実な史書の歌と同様に社

会から見られていたことを語つていともいえよう。芭蕉は、西行の歌に詠まれたとくくく清水は、実に浄潔であつて、試みにこの水を飲んで、浮世の塵垢に汚されている自分の俗腸を洗ひすゝぎたいと思つていたのであるから、西行の庵跡に立つて、西行の超俗清浄な心境に深く思いを寄せていたと察せられるのである。西行の吉野山の歌には、その限ない山の幽寂を詠じた句が相当あるので、芭蕉はそれらの歌にも心をひかれるものがあつたと思う。

その翌々年の貞享四年に再び近畿旅行に前途した時の紀行は、「吉野紀行」の名もあるよう、かざされてこの西行庵附近を訪ねている。

「苔清水

春雨の木下につたふ清水かな

よし野の花に三日とゞまりて、明ほのたそがれのけしきにむかひ、有明の月のあはれるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは撰政公のながめにうばはれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室がこれはいと打なぐりたるに、我いはん言葉もなくていたづらに口を閉ぢたるいと口をし」

とあつて、新古今調的のものを求める芭蕉の高古にして清艶な趣味が溢るゝばかりに見られる。文中、「西行の枝折」と言つているのは、西行の詠んだ

よしの山去年のしをりの道かへて

まだ見ぬ方の花をたづねむ

の歌のことである。芭蕉は吉野に三日滞在して思いのまゝに春色の情趣に浸つていたのであるが、そこには、西行遁世の地である吉野が如何に強く芭蕉の心を誘引したかがひそんでいゝ。

また、「おくの細道」に

「越前の境、吉崎の入江を舟に控さして、刈越の松を尋ぬ。

よもすがら嵐に波をはこばせて

月をたれたる汐越の松 西行

此の一首にて数景盡きたり。もし一辯を加ふるものは、無用の指を立つるがごとし。」

とあるのをみると、芭蕉はこの「よもすがら」の歌を西行詠と信じて、その遺跡を探ねずには居られなかつたようである。しかし、この「よもすがら」の歌は、西行作の証はなくて蓮如上人の文中、「吉崎にて」と前書のある四首中に見られるものであるのだが、芭蕉は、西行詠といえ、その真偽を深く探りもしないで盲目的にそれを信じこみ、讀嘆しているのである。芭蕉はこのように、盲信に近い態度で、西行を道の先達として深く敬愛しているが、それだけにまた西行をつぐものとしての強い自信を持つていたようである。

元祿六年、許六が帰郷を送る餞別に、芭蕉は「柴門辞」という文を書いている。その中で、

「予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。たゞ釈阿西行のごとばのみ、かり初にひちちらされし、あだなるたはぶれごと、あはれなる処おほし。」

と述べている。これは、俊成や西行の言葉は、たゞちよつとしたとりとめもない戯れの歌でも、しみじみと心ひかれるものが多いということであろうが、如何に芭蕉が俊成の幽玄や、西行の長高の風趣に心をよせていたかがわかるのである。

以上述べた事によつて、芭蕉が西行に対して、深く敬慕の情をよせていることが理解されるのであるが、芭蕉の書簡の中にも同様のことが考えられる二通がある。(省略)

芭蕉の俳諧という、その作法上の重大な名目となつてゐるのは、「おぢ」、「しをり」、「細み」、「にほひ」、「ひゞき」、「うづり」、「おも

かげ」などであつて、それは大部分が中世の歌学から伝わつて来たものである。しかし、芭蕉はそれをそのままとり入れてゐるのではなく、整理したり、それ以上に進化させながら、句作体験の上にはたらかしつてゐる。このことは、西行に対してでもあつて、芭蕉は、西行の生活とその芸術に深い理解をもち、敬愛をもつて終始したのであるが、その創作活動においては、ほとんど模倣をすることはしていないのである。しかし、西行の和歌に胚胎したり、或は換骨したり、西行の和歌のことばを用いたりなど、西行の字句をそのままとり入れていたりしている部分は相当にみられる。先ず句についてその例をあげてみよう。

○命なりわずかの笠の下涼み

これは、竹人の「芭蕉翁金伝」にみられる句であつて、宗房が江戸初下りの途中、佐夜の中山にて詠んだのである。(蝶夢編の「芭蕉翁堯句集」にもつてゐる。)この句は、「新古今集」にある西行法師の詠んだ

年たけてまた越ゆべしとおもひきや

命なりけりさよの中山

の和歌を背景として、自分がこうして旅路の笠に暑さをしのぎつゝ、佐夜の中山を越えるということも、西行の言つたように命あればこそだとの句意のようである。この句は、西行のもつ宗教的感謝の念ともいうべきものから、軽妙にさりげなく俳諧的に転換されていて、西行の歌の模倣のみにとどまつてはいない。また、この句は特に芭蕉に深い感銘をあたえたものと見えて、この句の外に

命こそ半種よ又今日の月

忘れずば佐夜の中山にて涼め

命二つ中に生きたる桜かな

○あすは粽難波の枯葉夢なれや

この句の「難波の枯葉夢なれや」の部分は、「新古今集」にある
津の国の難波の春は夢なれや

蘆の枯葉に風わたるなり

という西行の和歌をとつていのである。粽をつむ蘆の葉から難波を連想し、思いを西行の和歌によせて「難波の枯葉夢なれや」と詠んでいる。光陰は過ぎ易いものであつて、難波の蘆の枯葉の冬は夢と過ぎ、あすは蘆の若葉で巻いた粽をそなえる端午の節句であるというのが句意であるが、この句も前の句と同様、西行の歌の単なる模倣ではなくて、西行のもつ平安末期的な幽玄の世界を粽とすることで現実化し、卑俗化して、それによつて近世的世界に転換している。このことは、新しい世界への展開であるとも言えよう。

○年暮れぬ笠きて草鞋はきながら

この句は、「山家集」に

常よりも心ばそくぞ思ほゆる

旅の空にて年のくれぬる

とある西行の歌を踏んでいて、西行が「心細くぞ思ほゆる」と主観的な気持をあらわにしているのに対して、芭蕉は、「笠着て草鞋はきながら」と客観的に、即物的にのべているのである。このことは、俳諧的になされたとみてもよいと思う。

以上のことは、句の上にも見られるのではなく、芭蕉の言語文章のいづこにもそれらしい部分が見られる。例えば、「野ざらし紀行」の伊勢の西行谷において、

「暮て外宮に詣待りけるに一ノ華表の陰ほのぐらく、御燈処々に見えて、また上もなき峰の松風、身にしむ計ふかき心を起して、

みそか月なし千とせの松を抱あらし」

の記述がある。外宮を参拝して「また上もなき峰の松風」の身にしむところは、「千載集」に西行の歌として

ふかく入りて神路の奥を尋ねれば

また上もなき峰の松風

とあるのを踏んでいる。「西行物語」には、
「神路山の嵐おろせば峰の紅葉御裳すそ川の流に濃き錦をさらす。
ふと御垣の松を見やれば、千とせのみどり梢に顕る……(中略)……
ことに月の光も澄みのぼりければ、
神路山月さやかなるちかひにて

天が下をば照らすなりけり」

とあり、句の「千とせの松」と相通じるところがある。

「奥の細道」はその全篇がほとんど歌枕への探索を目的とした旅行記であるが、西行の旅のあとも随分尋ねている。その一節に、

「弥生も末の七日、明けぼのゝ空籠々として、月は有明にて光をさまれるものから、不二の峯幽かに見えて、上野・谷中の花の梢またいつかはと心細し。」

とある。これは、月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり……と矢立の筆を起こして、草の戸の出立の模様である。「またいつかは」とは、西行が仁和二年十月十日、四国へ旅する時、加茂社へ夜詣りした折の

「仁和二年十月十日の夜まゐりて、幣まゐらせけり……木間の月ほのぼのと常よりも神さびて、哀れに賞えて詠みける。

かしこまるしでに涙のかゝるかな

またいつかはと思ふ心に」

を踏んでいる。

以上は、西行の和歌がどんな風にとり入れられているかをみてきた

のであるが、その結果言えることは、芭蕉は西行を敬慕するのあまり、西行の和歌の字句をそのまま自分の句にとり入れたりはしているが、それは決して単なる模倣ではなく、その句が独立しても意味をなすようにその意味情趣をも生かしながらとり入れてのことである。そして、他方では、西行の心を心として新しい展開を示そうとしているのである。それは、「嵯峨日記」をみると、

「廿二日、朝の間雨降。今日は人もなくさびしきまゝにむだ書して遊ぶ。」

其詞

喪に居るものは悲しみがあるじとし
酒を飲むものはたのしみを主とし
愁に住するものは愁をあるじとし
徒然に住するものはつれづれを主とす

さびしさなくばうからましと、西上人のよみ侍るは、さびしさを主なるべし。

又よめる

山里にはまた誰をよぶこ鳥

ひとりすまんと思ひしものを

独すむほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失う。素堂此の詞を常にあはれむ。予も亦

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

とはある寺に独居て言ひし句なり」

とあつて、「さびしさなくばうからまし」は、「山家集」の西行歌

とふ人も思ひたえたる山里の

さびしさなくば住みうからまし

を指し、「山里に」の歌は、同じく「山家集」に「山家呼子鳥」と題して

山ざとに誰を又こはよぶこ鳥

ひとりのみこそ住まむと思ふに

とあるのを指している。蕉風の円熟を示す「猿蓑」を生み出しつゝ、嵯峨の去來庵において消閑生活のうちにも、西行をふまえてつゝ、歌の言葉である呼子鳥をかんこ鳥とかえたように、閑居のわびしさ、自然の中に「ひとり」を感じた西行のあはれが、蕉風のいわゆる「さび」となつてあらわれているのである。

また、句についても同様である。例えば、

○原中や物にもつかず啼くひばり

この句は、「山家集」の西行の歌

ひばり鳴く荒野に生ふる姫百合の

なにゝつくともなき心かな

を踏まえている。そして、西行の和歌から独立しても成りたつが、その筋は西行の和歌からひいて来ている。

○鰯よりは海苔をば老の売りもせで

この句は、西行の

おなじくば鰯をば干して売りもせめ

蛤よりは名もたよりあり

の歌の俳諧化したものである。つまり、和歌の世界から近世的世界に踏み入らせているのである。

三

芭蕉の作品を通して、西行の影響のあとを探ねて来たが、芭蕉が西行に対してどのような態度をとつたか大きく三つの段階に分けられるようである。

先ず第一に、芭蕉は、西行の「人格」と「生活」そして、その「芸術」に深い理解をもち、敬愛をもつて終始していたことである。この

ことは、芭蕉の全作品を通じて、西行の影響がありそうだと思われる個所が他の「古人」或は「古文学」の影響をうけていると思われる個所より目立つて多いということ、また、前述したように、何でも西行と名のつくものは、その真偽もたしかめずに盲目的に信じこみ、それに随うというような、盲信随順の態度となつてあらわれていることによつてもうなづけるのである。

第二に、芭蕉は自分の作品に、西行の和歌の言葉を用いたり、西行の和歌に胚胎したり、或は換骨したりする態度をとつている。この例は非常に多くみられるが、最初、西行の字句をそのままとり入れていた事から、だんだん發展し、西行の歌の意味情趣を生かしながら、西行の和歌から離れても完全に句意を独立させるに至つている。

このことは、新古今集以来の本歌取りの歌などとは異つていふところであつて、芭蕉が如何に西行の和歌に對して、その消化力が大であつたかがわかるのである。つまり、芭蕉の句の背景となつてゐる西行の和歌は、ある時は連句における前句の役目をしてゐるとも言えるのである。そして、それは、おもかげとなつて動いたり、にほひとなつて漂つたり、ひびきになつて力をひゞかせてゐるとも言えるのである。しかしながら、最初からこうあつたのではなく、やはり初めは和歌のとおり方が、縫い目の見えない渾成体とはちがつていて、そのとつて来た原形のと見えるものがほとんどである。それは、古歌の一部一句をそのままたくみにとり入れてはいるのであるが、完全に消化されてゐないのである。例えば、

命なりわずかの笠のした涼み

露とくくこゝろみに浮世すゝがばや

雪ちるや穂屋のすゝきの刈り残し

落ちくるや高久の宿のほとゝぎす

しら菊の目にたてゝみる塵もなし
などの句である。

第三に、芭蕉は西行の心を心として新しい展開を示す態度をとつたのである。つまり、西行の和歌をとり入れるについても、その和歌のこゝろ（和歌の意味）をとつてゐる。そして、和歌的なものから近世の俳諧的なものへと変えて行つたのである。例えば、

原中や物にもつかず啼くひばり

山寒し心の底や水の月

鯛よりは海苔をば老の売りもせて

などの句である。これらは、完全に句意も独立してゐて、芭蕉のものとして感ぜられるのであつて、芭蕉の文学的芸術として後世に伝わるどころの業績となつてゐるのである。

以上三つにわたつて、芭蕉の文学における西行の投影をみるのであるが、芭蕉が生命における重大な課題として、出家・隠棲・漂泊等を早くから内省したであらうことは容易に推察出来るし、西行敬慕の契機もそこにあつたとみてよいと思ふのである。

（水俣第一中学校勤務）

「もみぢ」考

…万葉集と八代集を資料として…

原 田 順 子

万葉集に於ける「もみぢ」の用例を調査するに、「紅葉あるいは「赤葉」の二通りの区別がある。そこで第一の問題として、「黄葉と紅葉」の区別について検討してみたいと思ふ。先ず次の表は、万葉集に於け